

# V ● 因果律と人間——言語論的転回 linguistic turn へ

## V-1 自然の因果律と人間の語る論理的必然性とは同じものだろうか？

### ○ 歴史における因果律

歴史家は、さまざまな史料を検証し、出来事をつなげて、ひとつの歴史像を浮き彫りにしていく。歴史家が考える出来事と出来事とのつながりは、万有引力のような普遍的かつ自然科学的な《因果律》にしたがったものと考えてよいだろうか？ 人間の口にする、不確かで曖昧な、せいぜい言語ごとの文法にしたがっているにすぎない、《論理的必然性》でしかないのではないか？

### ○ 近代的因果律の思想史的形成

【デカルト（1596-1650）の《コギト》——近代における主語＝主体＝主観（subject）の登場】

「我思う、故ニ、我在リ」Je pense, donc je suis (Cogito, ergo sum) 『方法叙説』

中世的な秩序（＝神のもと、表象と実在とが一致するという予定調和）が崩壊していく中で、デカルトは表象と実在との一致を《われ思う》という理性的思考のうちに回復させようとした。

→ 人間は誰しもが理性をもつ、という考え方……これは革命につながっていく考え方

【ヒューム（1711-1776）によるコギト批判】

原因と結果の必然的結合は、無条件に前提できるのだろうか？

（「思っている我」と、「在る我」とは同じ人物なのだろうか？）

「原因と結果との必然的結合は、原因から結果へのわれわれの推論の基礎とみなされている。けれども、われわれの推論の基礎は、習慣的結合から生まれた移行である。だから、必然的結合と習慣的結合は同じものなのだ。…必然性は精神のなかに存在する何かであって、対象のなかに存在する何かではないのだ。」『人間本性論』

「記憶のみが一連の知覚の持続と拡がりをつなぐのをわれわれに知らしめるのだが、何よりもこの理由で、われわれは記憶を人格的同一性〔理性〕の源泉とみなさなければならない。もしわれわれが記憶をもたないなら、われわれは決して因果関係の観念を有することはないだろうし、ひいては、われわれの自我と人格を構成するこの原因と結果の連鎖を有することもないだろう。…記憶は…相異なる知覚のあいだに…人格的同一性を発見する。」『同』

→ ヒュームによれば、原因と結果の結合は習慣にすぎず、せいぜい、「蓋然性」を示すにすぎない。

【カント（1724-1804）による先験的（超越論的）理性の証明（因果律へ）】

デカルトのように実在と表象とを調和させるのではなく、実在が表象に従属していると考えた。「対象が認識を規定するのではなく、認識が対象を規定する」『純粹理性批判』

→ したがって、純客観的な意味で因果律があるかどうかはともかく、人間が自然とかかわるかぎり、アプリオリに（前もって＝先験的に）そこに因果律があるとみなしてかまわない。

★ 歴史的因果律は、《自然の因果律》と《言語による論理的必然性》のどちらに属しているのか……？

## V-2 一九世紀、自然の因果律の時代

○ ニュートン力学の機械的・決定論的因果律（絶対的時空論）

## 【絶対的・数学的時空間概念】

「いかなる外的事物とも関係なく、つねに同じ形状を保ち、不動不変のまま……」『プリンキピア』。

- ニュートンの万有引力論の社会的な意義のひとつは、それまで天空（神の世界）と地上（人間の世界）とで別の理論で成立していると考えてきたキリスト教社会の前提を突き崩したことにある。
- しかし、この議論の特異性はそれだけではない。空間は均一で平坦なユークリッド空間であることを仮定しており、時間は別パラメーターとして同じように処理される。この力学の運動方程式において、力は二階微分、すなわち位置の変化量を微分することで得られる速度をさらに微分することで得られる加速度と、質料を掛けたものとして、一意的かつ機械的に求められる。このことの意味は、方程式に必要な現在の正確な値を得ることができれば、過去であろうと未来であろうと、正確に特定の時点での状態を知ることができることを意味する。
- 完全な因果律が成立している世界。

## 【ラプラスのデーモン】

「もしもある瞬間における全ての物質の力学的状態と力を知ることができ、かつもしもそれらのデータを解析できるだけの能力の知性が存在するとすれば、この知性にとっては、不確実なことは何もなく、その目には未来も（過去同様に）全て見えているであろう。」（ピエール＝シモン・ラプラス『確率論：確率の解析的理論』1812）

○ 人間社会の因果律もまた、ニュートン力学的決定論によって説明されようとしていた

## 【近代歴史学の誕生（ニーブール、ランケ、ミシュレ、チエリたち）】

「何よりもまず、われわれは、真理に対する愛を無垢のまま保ち、いかなる虚偽の見かけもすべて避けるべきであり、どんなに小さな末梢的なことでも、その確かさを完全に納得することなしには、確かなものとして与えないようにせねばならない。もしも、われわれが、自分で犯したと思い、たぶんほかの人は誰も見抜かないような過失を、可能なたびごとに打ち明けることをしないとしよう。また、筆を置く際に、次のように神に誓っていうことができないとしよう。「私はすべてを考量し吟味しました。そして私は、意識的に、本当でないようなことは何も語りませんでした。また私は自分自身に関しても他の人たちに関しても、どんなかかわりの意見をも述べませんでした。私は、私の公然たる敵についてさえ、私が死に臨んで責任を負いかねるようなことは、なに一つ主張しませんでした」と。もしも、以上のことができないのなら、科学も文学も、せいぜいわれわれを墮落させ、頹廃させる以外に役立たないだろう。」（バルトホルト・ゲオルグ・ニーブール（1776-1831）、Römische geschichte、1812）

- 科学において歴史を語る最初の事例。人間に到達可能な《客観的真理》の存在を高らかに主張。

## 【オーギュスト・コントの実証主義 positivisme、「諸時代の一覧表」】

「人類の歴史全体の中で、文明の各時代を自然の関係に従って配列しようとする理由は、同じ法則によって動植物を分類する博物学者の理由と全く同じである。ただ、前者の理由のほうが、なおいっそう強力なだけである。なぜなら、事実の正しい配列はどの科学にとっても非常に大切であるが、政治科学にとってはこれがすべてであり、この条件を欠けば、実践的目的に全く達し得ないからである。目的とは、もちろん、過去を観察することによって、今日の文明の発展が生み出そうとしている社会組織を決定することである。」（「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」）

- コントによれば、政治的決定は、実証主義者にこそ委ねられる。百科全書的な一覧表の作成は、同時に未来の政治的決断を可能にする。実証主義は、政治的決定と歴史学者の歴史的決定とを同一視できるような

正確な因果律の追究を可能にする。

○ 進歩史観の登場、合理主義の極限としての論理実証主義へ

人間の社会を自然界と同じ理論で説明しようとする 19 世紀の科学の傾向は、「社会進化論」(ハーバート・スペンサー)の隆盛を生み出し、人間の進歩に対する絶大な信頼を可能にした。最初の歴史主義のひとつである進歩史観が登場する。

→ 一九世紀半ばに登場したカール・マルクスは、エンゲルスによってダーウィンと並ぶ人物として紹介されていた。社会における人間の進歩の歴史を科学的に説明した知識人として……。

もし、われわれがある瞬間のすべての存在を知りえたなら…あとにつづく宇宙の歴史全体を予言できるだろう。…そして宇宙のある状態が次の瞬間にも繰り返し現われたなら、あとにつづくすべてが再帰し、歴史は循環小数のように繰り返される。

(ジョン・ステュアート・ミル、A System of Logic)

記憶している事件はかつて起こったことで、過去はすべて存在している、という記憶上の信念が存在する論理的必然性はない。そして次の仮説に論理的不可能はない。すなわち——世界は、完全に虚構の過去を《記憶した》人々とともに、五分前に生み出された。

(バートランド・ラッセル、The Analysis of Mind)

→ 論理的必然性と自然の因果律はほとんど同一視されている。そこから、実証主義的歴史学にかわって論理哲学(論理実証主義)が主役になる時代が生まれる。しかし……。

V-3 二〇世紀、実証主義から言語論的転回へ

○ ニュートンの機械論的因果律から相対性理論、量子力学へ

特殊相対性理論により、ニュートン力学のもたらした古典的因果律は、光速を超えない範囲においてしか通用しないものとなり、それをもとにした量子力学においては、完全に否定されるに至り、二つの事象の因果的関連は純粹に確率論的にしか言えないものとなっている。

○ 数学的(論理)実証主義の破綻

【ヒルベルト計画】

19世紀後半、科学の限界の有無を問う論争に対し、デュ=ボア・レイモンは「Ignoramus et ignorabimus 我々は無知である。そして無知でありつづけるだろう」と言った。それに対して数学者ヒルベルトはこう答えている。

「In der Mathematik giebt es, kein Ignorabimus! 数学にイグノラビムスはない！」

(ダフィット・ヒルベルト、Mathematische Probleme、1900)

数学はただの論理ではなく、数学による証明は存在論的証明と同じである、という考え方のもと、数学を完全に論理的に形式化し、数学全体の完全性と無矛盾性を提示しようとした「ヒルベルト・プログラム」。数学的に証明されたものは、完璧な存在論的确实性を得て《実証》される。とりわけ「有限の立場」(すなわち人間)から《無限》を証明しようとする点に彼の計画の峻烈さが現われているといえ、彼はその実力によって数学の世界の頂点に君臨する。

→ ラッセルたちがいうように、数学を論理に置き換えるなら、やはり、歴史家の論理を記述するテキストもまた、数学的確かさでもって事実確定できる。歴史学の不確かで曖昧な《実証》とは桁の違う存在論的確かさで《実証》できるとされた数学。

【ゲーデルの不完全性定理】

1931年、クルト・ゲーデルは「数学は自己の無矛盾性を証明できない」ことを証明してしまう(《不完全性定理》)。

《クレタ人のエピメニデスは言った、クレタ人はいつも嘘をつく》。嘘つきのパラドックスと呼ばれる、この無矛盾な命題の無矛盾性を、数学は証明することができない。これによって「ヒルベルト計画」は瓦解する。

### ○ 言語によって人間の歴史を科学的に実証することは可能なのか——言語論的転回 linguistic turn へ

20世紀前半、すでに数学や物理学のような自然科学の領域において、古典的な因果律や実証主義は破られていた。社会科学・人文科学の領域においては、言語と現実との関係性の切断として現われることになる。

#### 【ソール・クリプキの《固有名と可能世界》】

クリプキの問い：《固有名》は内的な論理的必然性と、外的な他者の名指しのいずれに属するのだろうか？

固有名は、他者の名指し。したがって、固有名の周囲に歴史家が巡らせてきた論理的記述と固有名とは、致命的に分断されていることになる。(Naming and Necessity, 1972)

- 特定の史観にもとづく歴史叙述のみならず、固有名を扱うすべての歴史記述が、客観的な固有名それ自体と結びつかない主観の産物となる。
- 歴史学者が扱っているのは、当の歴史学者がどのように主張しようとして、真の現実世界とは異なる《可能世界 possible world》。歴史学者の数だけ、歴史学者の語る言語の数だけ、《可能世界》ができてしまう。

#### 【ジャック・デリダの《テキストとその外部》】

デリダの問い：言語とはなにか？

「ところで、言語の正確さと厳密さ、つまり文字言語のこの住み家は、どこにあるのだろうか。何よりもまず固有性の中にである。正確で厳密な言語は、完全に一義的で固着的、つまり非-隠喩的でなければならないだろう。言語は、自身のうちの比喩を抑圧したり消し去ったりする程度に応じて書かれるのであり、また進歩=退歩する (pro-regresse) ののである。比喩というのは、言語の起源ということである。なぜなら、言語はもともと隠喩的なものだからである。」

ジャック・デリダ『グラマトロジーについて』1967

- 言語は本質的に、対象を直接指示していない。対象とは切り離された「隠喩メタフォア」。「テキストの外部は存在しない」。したがって、言語による対象の表象は、かならず《間—化エスパスマン》すること。デカルト的予定調和もコント的な実証主義の実践も、彼らの使用する言語それ自体が裏切ってしまう（これをデリダは《脱構築》と呼ぶ）。
- 歴史=物語批判へ
- 懐疑主義は頂点を極める……進歩的知識人から批判的知識人へ

### ○ 歴史を叙述しようとする者の不在

個々の古い事実を検証しようとする歴史学者は大勢いる。しかし、歴史主義批判、歴史=物語批判や進歩観念の弱まりによって、人間の歴史を一貫した歴史イメージによって論じようとする歴史家の存在は世界的に希少なものとなりつつある。

#### 【エリック・ホブズボーム (1917-)】

当初は二〇世紀の歴史を the Age of Catastrophe (戦前)、Golden Age (戦後) として区分。しかし、ソ連の崩壊を期に、一九七三年以後を Crisis decades として区分。それはある意味では、一貫した歴史像の不在を意味しているといえる。(Cf. フランシス・フクヤマ「歴史の終わり」との違い)

「新しい危機の時代の結果をわれわれはまだ知らない。それを考える仕事は21世紀の歴史家である」(『On History』)。